「あなたにお會いしなかった數日の間に、」と彼はいった、「私は多くのものをよみ、とくにまだ讀みおえてはいない中國の小說は、私にはたいそう注目すべきように思われる。」――「中國の小說ですか?」と私はいった、「それはきっと非常に特異なものでしょう。」――「人が思うほどそんなに特異なものではない。」とゲーテは答えた。「人間であれば、考えかたや感じかたは、ほとんどわれわれと同じだよ、そして、互いに相ひとしいということに、だれでもたいそうたやすく氣づくだろう。……」

……――「しかし」と私はいった、「おそらくこの中國の小說はもっとも例外的なものの一つではないでしょうか?」――「決してそうではない」とゲーテはいった、「中國人はこのようなものを幾千も持っている。しかも彼らはわれわれの祖先がまだ森林の中で暮らしていた頃にはすでに持っていたのだ。」

（エッカーマンのゲーテとの對話、一八二七年一月三十一日、水曜日）

Le Monde Chinois

Jacques Gernet

Collection „Destins du Monde",
Librairie Armand Colin, Paris, 1972,
765 pp., 36 pl.

これは、「世界の運命」叢書の一冊として、一九七二年にパリで刊行されたジャック・ジェルネ氏の『中國世界』の扉にかきとめられた文章である。一五〇年も前にかの文豪ゲーテが語った言葉を、エピグラフとして扉にかきしるしていることは、本書執筆にあたっての著者の姿勢をはっきりと示しているといえよう。中國世界を單なる異國趣味としてながめるべきではないと、ゲーテが直觀として感じとったことを、著者は深い學殖と豐富な資料にもとづきつつ、ヨーロッパの一般讀者に、敷衍解說せんとして、A5版、本文だけで五七〇頁、付錄をあわせると八〇〇頁におよぶこの中國史概說をかかれたのである。

「世界の運命」叢書は、『ギリシアの冒險』『ローマとその運命』『ヨーロッパの誕生』『物質文明と資本主義・第一部』といったヨーロッパの歷史のみでなく、『イスラムとその文明』や本書のようなアジア世界をも包括し、すでに十冊が刊行され、『インド文明史』などが近刊豫定になっている。

著者のジェルネ氏は、現在、パリ第七大學（先年の學制改革前のソルボンヌ大學、すなわちパリ大學文學部）教授、東アジア教育研究機關長、高等研究院第六部門（社會經濟部門）教授であって、エチエンヌ・バラジュなきあと、フランス中國學を代表する歷史家である。氏は、一九六三年夏・七一年秋と今春（七三年）の三度にわたって來日され、筆者はそのたびごとに京都で氏の公開講演をきく機會にめぐまれた。

バラジュについては、本誌本欄にも、これまで何度か取上げられた。すなわち、'Le traité économique du "Souei-chou"（『隋書食貨志』研究）が愛宕松男氏により（第十六卷第二號）、'Chinese

Civilization and Bureaucracy'（『中國の文明と官僚制』）が衣川強氏により（第二十四卷第三號）それぞれ批評紹介され、また刊行されつつあるその追悼論文集'Études Song in memoriam Étienne Balazs'も、川勝義雄氏によって（第三十一卷第四號）紹介されている。ところが、ジェルネ氏については、『東洋學報』誌上では、學位論文である'Les aspects économiques du bouddhisme dans la société chinoise du Ve au Xe siècle. 1956'（『五—十世紀中國社會における佛教の經濟的諸樣相』）が池田溫氏により、「敦煌關係近刊數種」の一つとして（第四十一卷第三號）、'La Vie Quotidienne en Chine à la veille de l'invasion mongole 1250～1276, 1959'（『モンゴル侵入前夜における中國の日常生活』）は、その英譯刊行を機に菊池英夫氏によって（第四十六卷第四號）、それぞれ批評されているが、本誌では、これまで書評の對象に取上げられることはなかった。この『中國世界』のごとき、專門家を對象としたのでなく、一般の知識人讀者を相手にしてかかれた通史・概說書は、本欄には取上げにくいのは十分承知のうえで、あえて紹介しようとするのは、本書が、今後、ヨーロッパにおける中國史概說書として、スタンダードの地位を占めることが豫想されるからであり、また、中國史の時代區分について、はっきりした立場にたってかかれた、ヨーロッパ人による最初の中國通史であるからである。

ジェルネ氏は、はじめフランス遠東學院の研究員として中國學の研鑽につとめ、最初の單行本、'Entretiens du Maître de Dhyâna Chen-Houei du Ho-Tso (668～760)'（『荷澤神會禪師語錄』）をハノイで發表されたのが一九四九年であり、ついで一九五六年には敦煌文書を驅使した學位論文『五—十世紀中國社會における佛教の經濟的諸樣相』をサイゴンで刊行し、南北朝隋唐時代の佛教思想とその社會的基盤の研究者として學界に確固たる地位を占められた。それ以後、研究領域を前後の時代にひろげていくとともに、一般むけの叢書の中國の部の著者として登場していかれた。これは、パリにかえり、ソルボンヌ大學の教壇にたたれたことが、おそらく最大の理由であったと思われる。

'La Vie Quotidienne"（日常生活）叢書の一冊『モンゴル侵入前夜（一二五〇—一二七六）における中國の日常生活』を刊行し、東京夢華錄をはじめとする宋元時代の典籍にしたしまれたのが一九五九年であり、"Que Sais-Je?" 文庫の "La Chine ancienne—Des origines à l'empire"（『古代中國』）を執筆されたのは一九六四年のことである。その前年に、「中國における歷史思想の起源」についての氏の講演を筆者がきいたのは、このクセジュ文庫の執筆過程の見解であったことになる（先日、うかがったところ、この時の講演内容は、どこにも發表されていないとのことである）。「起源から帝國まで」という副題のついたこの『古代中國』は、中國文化の初めから秦帝國の成立までの歷史を簡明に叙述し、穩當な意見がおおく、そのつづきが待ちのぞまれたのであった。一九七一年に來日されたときの講演題目は、「十七・八世紀における中國とヨーロッパとの交渉について」であり（『東方學』第四十四輯に、福井文雅氏による翻譯が掲載されている）、その際、講演の冒頭で、「今日はまず最初に、皆樣方にお許しを得ておかなければならないことがございます。それと申しますのは、招待の御通知を戴きました時には、私はちょうど中國史概說を書き終えようとしているところでした。それはフランスの一般讀者向けの通史でありますが、私

はその仕事に七年間没頭しておりました。そこで、その間、専門的・個別的な研究に時間を割く餘裕が、事實上、ありませんでした。」とことわられ、七年をかけた中國の通史がほぼ完成していることを知り、その刊行をおおいに期待していた。そのまち望んでいた成果が、「世界の運命」叢書の『中國世界』と題する本書なのである。目次をかかげることにしよう。

序　章

第一篇　上古君主制から中央集權國家へ（紀元前十七―三世紀）

第一章　上古君主制

第二章　諸侯の時代

第三章　中央集權國家の形成

第四章　古代の遺產

第二篇　中央集權國家の飛躍、展開、衰運（紀元前二世紀―紀元後二世紀）

第一章　征服する帝國

第二章　膨脹の原因と結果

第三章　豪族の興起と政治制度の危機

第四章　漢代の文明

第三篇　中世（三―六世紀）

第一章　夷狄と貴族

第二章　中世の文明

第四篇　中世から近世へ（七―十世紀）

第一章　貴族の帝國

第二章　近世への移行

第三章　世界への開眼から古典傳統への回歸へ

第五篇　中國〈ルネッサンス〉（十一―十三世紀）

第一章　新しい世界

第二章　中國〈ルネッサンス〉の文明

第六篇　華化せる帝國からモンゴルの占領へ（十一―十四世紀）

第一章　華化せる帝國

第二章　モンゴルの侵入と占領

第七篇　專制君主と宦官による統治（十四―十七世紀）

第一章　再建と膨脹

第二章　政治・社會・經濟の變化

第三章　第二回目の中國〈ルネッサンス〉と明末の危機

第四章　明代の精神生活

第八篇　獨裁者の慈父主義（十七―十八世紀）

第一章　征服と滿洲的秩序の創始

第二章　開明專制君主

第三章　十七世紀中期から十八世紀末にいたる精神生活

第九篇　衰運から割讓へ（十九世紀）

第一章　大衰運

第二章　社會の破裂とその結果

第三章　近代化への挫折と外國闖入の進行

第四章　十九世紀における思潮

第十篇　十字架にかけられた中國（二十世紀前半）

第一章　經濟と社會の瓦解

第二章　二十世紀前半の政治動向

第三章　哲學と文學の動向

結　論

この目次を一瞥すれば分るように、古代社會は漢代で終りをつげ、三世紀から六世紀にいたる魏晉南北朝時代を中世とし、隋唐時代を中世から近世への移行期と理解し、宋代に中國〈ルネッサンス〉があって、近世社會が始まるとする。この時代區分は、あきらかに内藤湖南・宮崎市定兩氏らのいわゆる京都學派の學説にまったく一致しているのである。しいて京都學派との差違を求めれば、明代末期、十六世紀後半から十七世紀初頭にかけて第二回目の中國〈ルネッサンス〉を設定していることであって、これは、一九七一年の講演の際にも、「宋代を中國の大ルネッサンスの時代とします と、明末は第二のルネッサンスのようでありますが、ここではとり敢えず、その時代の特色としまして、次のような事象を擧げておきましょう。」として、銀塊による商業經濟の大發展、生産技術の發達、都市生活の發展といったいくつかの社會的變化のほかに、文化的現象として、短篇や小説や芝居の發展、技術や自然科學に關する著述の增加を數えられた。これらは、本書でも、第七篇の第三章第一節「第二回目の中國〈ルネッサンス〉」(三七〇—三七四頁)における、〝大商業と家内工業の飛躍〟・〝技術の發達〟・〝都市と商人の社會〟の項や、第四章第二節「一五五〇—一六四四年の〈ルネッサンス〉」(三八四—三九二頁)における、〝反體制思想〟・〝新しい科學精神と經驗知識に對する新たな關心〟・〝都市文學〟といった項目で要領よく解説されている。

この第二の〈ルネッサンス〉に先だつ宋代の〈ルネッサンス〉は、その萠芽を八世紀後半にまで遡らせうるとして、次のように主張される。六世紀末に始まる隋唐時代は、貴族と從屬(客・部曲・奴婢)との間の人格關係・經濟・文學・藝術・宗教信仰——唐代は佛教の黄金時代であるといわれる——に關して〈中國中世〉とよべるものの發端になお全く潛んでいるとはいえ、東アジアにおける中世世界から〈近世世界〉への移行期にあるというべきである。變化の前兆は、七五五—七六三年の安祿山の大軍事反亂の翌日に現れる。この〈近世への移行〉の時期が、五九〇年から六二五年にかけて基盤をすえられた〈貴族の帝國〉の後を繼承する。唐の中期、八世紀後半から、中國における〈ルネッサンス〉の氣配が濃厚に現れてくる。韓愈や柳宗元の古文運動がおこり、會昌の排佛以後、佛教が衰退してゆくのである。第五篇、中國〈ルネッサンス〉の第一章、「新しい世界」では、宋の中央政府が、財政經濟を擔當する三司と、軍事擔當の樞密院と、内閣の中書門下との三つに機能分化して能率をあげた點を指摘し、范仲淹や新法を斷行した王安石の革新運動を高く評價する。また、徵兵制から傭兵制へと變化した軍隊で、火器が使用されるようになった點を强調し、宋の新しい社會で、從來の貴族にかわって金利生活者階級が出現し、社會がたいそう流動的になり、貨幣經濟が大發展したことを述べられた。第二章、「中國〈ルネッサンス〉の文明」では、宋代に、從來の學者文化に對して民衆文化が展開し、木版印刷術が普及し、活版印刷術さえ試みられ、書物生産が大規模となって科學の發達に貢獻した。科學的な考古學が登場し、司馬光の資治通鑑や鄭樵の通志のように歷史學にも新しい型の著作が出版され、周敦頤から朱熹にいたる間に宇宙論や倫理學の面で新局面をひらき自然哲學を發展させた、とされる。十一世紀から十三世紀にいたる中國〈ルネッサンス〉時期の經濟面・精神面での飛躍は驚嘆すべきものであって、十三世紀末のマルコ・ポーロの驚きはみせかけではなかった。西洋の近世を出現

させる大發明のすべてが、ここにみられる。このようにジュルネ氏は結論されるのである。

宋代ルネッサンスの先進性、西洋への寄與を強調される場合にかぎらず、本書全體を通じ、中國の社會・文化を、ヨーロッパの社會・文化との對比でとらえ、ヨーロッパ思想との交流を重視し、世界史のうちに位置づけられる點に特色がある（この點は、先日の「マテオ・リッチと明末の中國思想界」と題する講演をきいた際にもあらためて感じられた）。

大部の書物ではあるが、著者の主張を一目瞭然たらしめる圖表や地圖がたくみに活用されており、一般讀者の理解に便ならしめているのも、本書の特色であろう。たとえば、中國の各省と、ヨーロッパの各國とを、それぞれの面積や人口・人口密度の順にならべた一覽表（一六・一七頁）によると、面積では、一番廣い四川省だけでフランスやスペインより廣く、もっとも狹い江蘇省や浙江省はブルガリアよりは狹いがハンガリーよりも廣く、スイスの二倍半もある、といったことが分るし、一九五七年の人口統計によれば、山東省の人口はイタリアやイギリスの人口とほぼ均しく、河南省の人口はフランスの人口に匹敵することなどが、ただちに了解される。また、三三一頁の中國世界から中世ヨーロッパへの技術の寄與という表では、後期十字軍時期とモンゴル膨脹時期に、それぞれ中國からヨーロッパに傳えられた技術を列擧し、それらが中國ではいつごろ發明されたものであったかを示しているし、二五二・二五三頁の、唐代の中國が蒙ったり與えたりした影響のさまを示す地圖など、說得力に富んでいる。（二九九頁上段の「渾象南極圖」が、裏表が反對に印刷されているのは、お愛敬である。）

本書で使われた中國語の表記法が、漢語拼音方式であるという事實は、特記すべきことである。これまで、イギリスやアメリカで出版される書物がウェード式であるのに對し、フランスでは傳統的に、遠東學院方式を採用してきた。ジュルネ氏のこれまで發表された著書も、遠東學院方式であったし、とくにクセジュ文庫『古代中國』では、「中國名の音寫にはフランス式表記法を採用した。この表記法は中國語の實際の發音に合致することは稀れであるが、フランスの一般讀者には親しまれているという長所があり、それに、中華人民共和國で使用している公式の表記法よりもとまどわせることが少ない。」と、わざわざ脚注をつけられていたからである。本書で、その中華人民共和國で使用している公式の表記法、拼音方式を採用したことは、ある程度の抵抗は豫想されるとはいえ、今後フランスで刊行される中國研究書におおいに影響を與えることであろう。

本書には、文獻目錄、人名・地名・書名・件名の各索引のほか、一二〇頁にわたる詳細な中國史年表が、紀元前十七世紀から一九六九年まで、歷史欄と文明欄にわけて付加されていて、讀者に便宜を與えている。索引はジャック・ダール氏の援助にかかるとのことであるが、年表は著者自身が作成されたのであろう。最近、中國史の年表作成に少なからぬ時間を割いた經驗をもつ筆者には、その勞苦がひとしお察せられる。文獻目錄には、中國人や日本人によってかかれた業績はかかげられていない。しかし、これは、本書の執筆にあたって、それらの研究を參照されなかったことを意味するのではない。「本書は、方針として、專門家にではなく一般大衆に向かってかかれているので、中國とその境界に關する尨大な業績をあげ

ている中國語と日本語でかかれた全出版物は、この文獻目錄から除外されている。」とわざわざ斷わっておられるからである。

近着の T'oung Pao (VOL. LVIII) には、ポール・ドミエヴィル氏による本書への書評が掲載されており、それによると、本書は、一九七二年度のフランス學士院賞を受賞したという。當然うけられるべき榮譽であり、ご同慶の至りである。

「歷史を思惟することは確かにこれを時代區分することである」というクロォチェの言をまつまでもなく、時代區分の問題は、いつもわれわれの意識のうちにある。第二次大戰後の日本における中國史學界最大の論爭であった時代區分論爭は、周知のごとく、前田直典氏の「東アジヤにおける古代の終末」(一九四八年四月)が發表されてから活發となった。前田氏の問題提起は、その前年にかかれた宇都宮清吉氏の「東洋中世史の領域」に對する批判から出發したのであり、宮崎市定氏については、一九四〇年にかかれた、ほぼ宋代までの概說である、『東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社會』を主として對象とされたのであった。宮崎氏の通史『アジヤ史概說』正篇・續篇が刊行されて、その全構想が公開されたのは、一九四七年十二月と四八年九月のことである。それからはや四半世紀、時代區分にはっきりした態度を示したジェルネ氏の通史『中國世界』を手にしえた現在、京都學派の開祖たる內藤虎次郎のあらゆる業績を網羅した『內藤湖南全集』全十四卷(筑摩書房)がほぼ完成し、前田氏の全業績を集錄した『元朝史の研究』が東京大學出版會から出版され、そこには時代區分論も別篇として收められた。そして『アジア史概說』の新版が、現代アジア史の章をつけ加え、裝を新たにして學生社から刊行されようとしている。われわれは、原點にたちかえって、中國史の流れを考えるべき好機會にめぐりあっているといえよう。

一九七三年五月十二日(礪波　護)